

大田市埋蔵文化財調査報告 7

石見銀山遺跡発掘調査概要2

1 9 8 9 , 3

島根県大田市教育委員会

序

石見銀山は中世後期から近世初頭において、佐渡金山とならぶ日本の資金庫として、史上にその名を残す鉱山です。

石見銀山遺跡として今日に伝わる数々の遺構、遺物は単に当大田市の文化財にとどまるものでなく、その一部は国指定史跡とされ、広く貴重な文化財であることが認められているところです。また、この石見銀山遺跡をどのように保存整備し、活用していくかということは、当市のみならず島根県全体の課題となっているところです。

この貴重な文化遺産を子孫に引き継ぐために、昭和44年の国指定の前後から、いくらかの部分については整備を図り、活用を促してきたところでありますが、幸いにして昭和58年度から開始された島根県教育委員会の主導による石見銀山遺跡総合整備計画策定事業をふまえ、昭和62年12月にはまちなみの部分が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、その整備と活用を始めることができました。

また、史跡についても昭和58年の発掘調査、60年度の分布調査などをふまえた、県の総合整備計画や当市の総合整備構想を基本に、整備が進みつつあるところです。

このような整備進捗に対し、文化財保護の立場から、整備地域周辺の遺跡の範囲や保存状況の確認が必要と考え、今年度より発掘調査を再開したところです。

特に、今回調査をおこなった龍源寺間歩遺跡では、遺構が良く残存していることが判明しました。また近世の遺構の状況を伝えた絵図も見つかりましたので、この報告書に掲載しております。広くご活用いただけることを祈念いたします。

平成元年3月

島根県大田市教育委員会

教育長 渡 辺 晴 夫

例 言

1. 本書は昭和63年度の国県補助事業として島根県大田市教育委員会が実施した、石見銀山遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査体制は下記のとおりである。

●島根県大田市教育委員会

教 育 長	渡 辺	晴 夫
文化振興室	渡	吉 正
	大 国	晴 雄
	遠 藤	浩 巳 (担当者)
	林	泰 州
	木 志 美	寿 津

●調査指導

村 上	勇 (広島県立美術館)
鳥 谷	芳 雄 (島根県教育委員会文化課)

3. 収録した地図・実測図は大田市教育委員会により作成したものを主とし、一部については関係機関作成のものを利用した。

4. 出土遺物及び作成した図面・写真は、大田市教育委員会にて保存している。

5. 実測図等に示した方位はいずれも磁北である。

6. 本書の執筆・編集は上記の遠藤浩巳がこれを行い、関係各位の協力を得た。また、出土遺物については村上勇氏よりご教示をいただいた。記して謝意を表します。

目 次

I . 調査の概要・経過	頁 1
II . 石見銀山遺跡の概要	3
III . 調査の概要	7
IV . 出土遺物	19
V . ま と め	24

図 版 目 次

図 1 石見銀山遺跡位置図	頁 2
図 2 石見銀山遺跡龍源寺間歩遺跡位置図	7
図 3 龍源寺間歩遺跡調査区設定図	8
図 4 龍源寺間歩遺跡 I 区第 1 遺構面実測図	9
図 5 龍源寺間歩遺跡 I 区 S B 1 実測図	10
図 6 龍源寺間歩遺跡 I 区第 2 遺構面実測図	11
図 7 龍源寺間歩遺跡 I 区第 2 遺構面実測図	12
図 8 龍源寺間歩遺跡土層図	13
図 9 龍源寺間歩遺跡 II 区第 1 遺構面実測図	14
図 10 龍源寺間歩遺跡 II 区第 2 遺構面実測図	15
図 11 龍源寺間歩遺跡第 3 遺構面実測図	16
図 12 龍源寺間歩遺跡遺構配置図	17
図 13 龍源寺間歩遺跡 I 区第 2 遺構面出土陶磁器実測図	20
図 14 龍源寺間歩遺跡 I 区整地層出土遺物実測図	21
図 15 龍源寺間歩遺跡出土古銭拓影	21
図 16 龍源寺間歩遺跡 II 区出土遺物実測図(1)	22
図 16 龍源寺間歩遺跡 II 区出土遺物実測図(2)	23

I 調査の概要・経過

石見銀山遺跡は昭和44年にその一部が史跡指定を受け、代官所跡と坑道跡である間歩を中心に整備や活用が進められ、その知名度も序々に上昇し、年間来訪者数も20万人を超えるまでとなった。

埋蔵文化財としての石見銀山遺跡はこれまで、個々に指定された山吹城跡や間歩などがあったが、いずれも大まかな様相や写真などによる整備が中心となり、近世考古学の分野からはとりあげるに至らず、また近世考古学自体も未だ著についていなかった。

昭和53年から調査と整備を計画した山吹城跡は、戦国期における石見銀山争奪の主たる舞台であるが、この計画の前提となる石見銀山遺跡の整備計画の策定がまず先決の課題と考えられた。これは昭和53年に島根県文化財保護審議会によって県教委へ答申された「島根県文化財保護行政長期計画について」の中で求められている文化財集中地区における整備計画の樹立にも通じるものである。

昭和58年度から開始した石見銀山遺跡総合整備計画策定事業は4ヶ年計画で石見銀山遺跡の整備にかかわる基本構想、基本計画の策定をめざし、調査と検討を行うものである。そして昭和58年には蔵泉寺口番所跡推定地と代官所南地区の発掘調査を計画、遺跡の遺存状況の確認、および保存・整備の資料を得ることを目的とし調査を実施した。調査の結果、蔵泉寺口番所推定地では十分な遺構がつかめなかったものの、代官所南地区では代官所に関連すると思われる小規模な建物跡を検出した。

昭和62年12月には、まちなみの部分が重要伝統的建造物群保存地区に選定され、その整備と活用を始め、事業も軌道にのりはじめた。このような整備関連事業に対し文化財保護の立場から、昭和63年度発掘調査を再開した。今回調査をおこなった龍源寺間歩遺跡は、史跡指定された7坑道跡の1つで現在2つの坑口が開口し、周辺に2つの試掘坑が確認できる。江戸時代、間歩の前には銀山方の役人が詰めた「四ツ留役所」等の施設があったことが『石見銀山絵巻』や古文書からうかがえ、今回は主として、それらの遺構の遺存状況等の確認を行った。現在入口となっている坑口の左側をⅠ区、右側をⅡ区とし、約200㎡を対象に6m四方のグリッドを設定し調査を実施した。

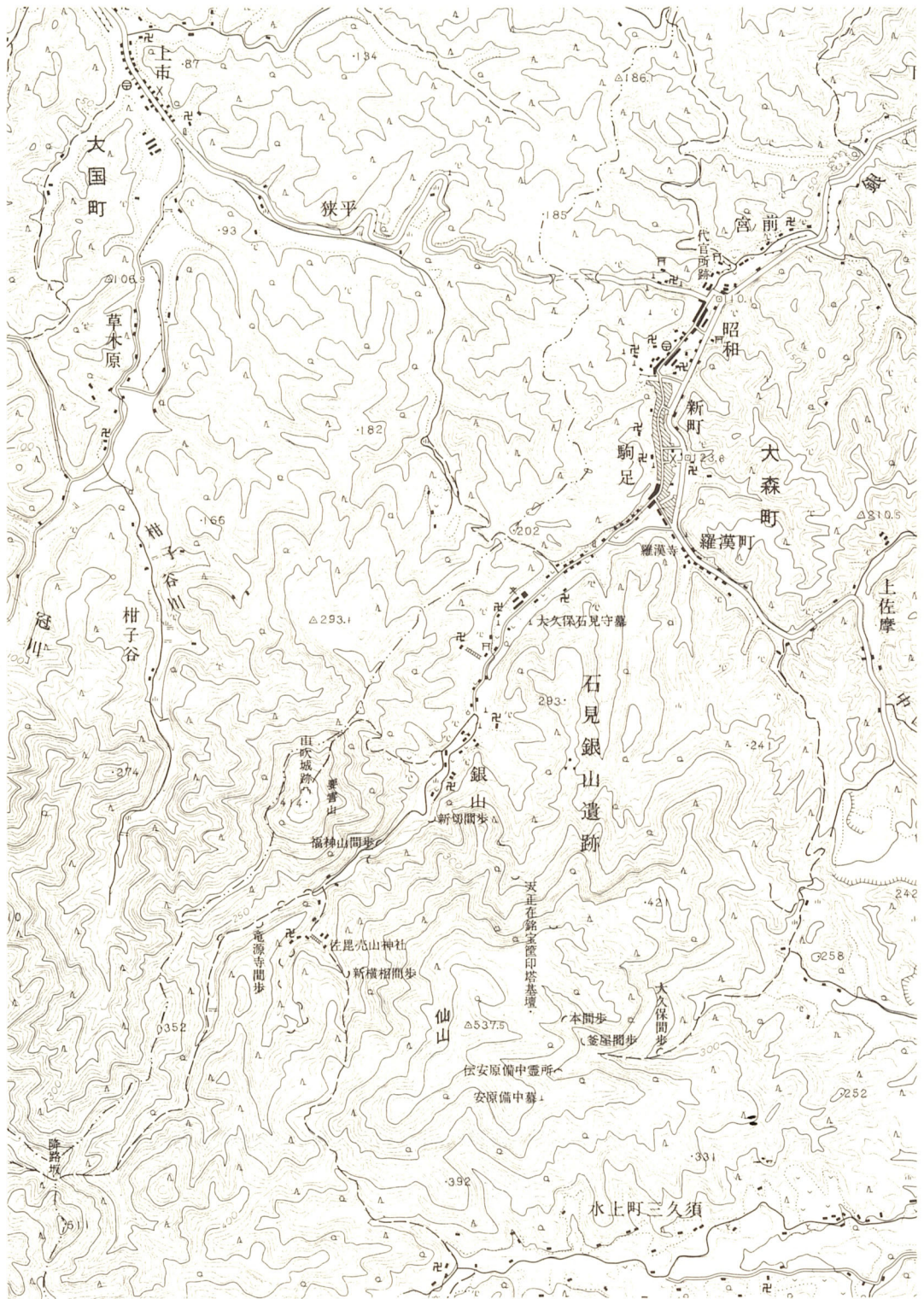


図1 石見銀山遺跡位置図(1/25,000)

Ⅱ 石見銀山遺跡の概要

1. 銀山史について

石見銀山が発見されたのは鎌倉時代末期の延慶2年(1309年)といわれ、本格的に発掘が開始されたのは室町時代中期の大永6年(1526年)である。

石見銀山に最初目をつけた武将は周防の国(山口県)の大内義興。そのころ、銀山仙の山は自然銀(露頭銀)が大変豊富で、大内氏は沢山の掘子大工を連れて入山し、産銀に励んだ。そのころから、銀山の昆布山谷には荷売屋や居酒屋やめし屋などが立ちならび、次第に鉾山町が形成された。享禄4年(1531年)銀山の盛況ぶりを見た邑智郡川本、温湯城城主小笠原長隆は兵3,500を發し、銀山を奇襲攻撃して、掌中に収めたが、3年を経て、大内氏は再びこれを奪い返し、やがて出雲の尼子氏がこれに加わって、銀山争奪戦は永禄5年の毛利氏の完全占領まで約35年間続く。

天文2年(1533年)8月には筑前(福岡県)博多から禅僧宗丹と慶寿がやって来て、灰吹精錬法を伝え、銀山七谷には家数が13,000軒もあったと記されているので、人口は5万~6万人位は居たのではなかろうかと推測される。

天文8年(1539年)8月に昆布山谷にてっぽう水が出て1,300人が流された。そのころ、大内氏に納める貢銀(税金)は年間500枚くらいで、石東海岸へは明の貿易船がひしめき、銀山の枋畑には長崎から唐人が来たといわれる。

銀が盛んに掘り出されたのは大永6年から天正の頃まで約60年間で、最盛期の天文の頃には年産2,000貫以上の銀が産出され外国へ輸出されていたのではないかと推察される。

その頃、中央では秀吉が天下統一を進め、銀山は秀吉と毛利氏との共同管理に移行し、文禄2年(1593年)の朝鮮出兵時には、秀吉は石見銀を博多へ運んで貨幣に鑄造して文禄丁銀(ゆずり葉銀)を造り兵糧を仕入れて戦費に充てた。

慶長5年(1600年)関が原の戦で徳川方が勝つと家康は石見銀山へ上使を派遣して翌6年から大久保長安を駐在させて銀山の管理奉行に当らせた。その頃、備中国(岡山県)から安原伝兵衛という山師が来山していたが、銀山の清水寺の本尊十一面観音を深く信仰して釜屋間歩の鉾脈を発見、おびただしい銀を掘出して貢銀3,600貫も運上(納入)し、家康から辻ヶ花染丁字文胴服(国指定重要文化財)一領と扇一柄(市指定文化財)を拝領した。

その頃、石見銀山は最盛期で「銀山旧記」(江戸時代にまとめたもの)には「慶長・寛永の頃、人口二十万人、寺院百ヶ寺、一日に米を費やすこと千五百石…」とか「家数二万

六千余…」などと記されている。人口20万人は少し誇張としても家数26,000軒に平均家族人数3人から5人を見て乗ずると凡そ8万人から13万人位の数になる。この頃の産銀糧も8,000貫から10,000貫位はあったであろうと推定される。

江戸時代中期からは産銀が著しく減少して、延宝年間(1673年～1680年)に入ると奉行は代官に替り産銀も年産400貫位に下り、それから次第に減少して、幕末の安政6年(1859年)には、わずか30貫にとどまった。代官所は頭を痛め山師たちへ資金を貸し付けて増産をはかったが、果せなかった。

天領(幕府の直轄領地)時代265年間には奉行、代官、預り(他藩の大名が兼務する)が59人も入れ替わり、石見銀山御領内約150ヶ村4万8千余石の統治と銀山の管理を行った。その中でもシルバーラッシュを起した初代奉行大久保石見守長安と享保17年(1732年)の大飢饉を救った19代目の代官井戸平左衛門は有名である。

慶応2年(1866年)には、戊辰戦争が起き、長州(山口の毛利藩)軍は石見へ進撃し、益田の七尾城、浜田城を落して銀山御料内へ侵入した。最後の代官鍋田三郎右衛門は家来を引き連れ備後国(広島県)の上下陣屋へ逃亡、長かった徳川時代(天領時代)の幕を閉じた。

長州軍が大森へ到着したのは慶応2年7月24日で、その頃、米の相場(値段)が急に上り、大田地方のあちこちで百姓一揆が起き、長州軍の手でまもなく鎮圧された。

石見銀山は266年振りで再び毛利氏の管理にゆだねられ明治2年の版籍奉還まで毛利大膳大夫の名において、長州藩、高州庄吉と同藩士武田伊三清が代官心得として旧銀山料の管理と統治の任に当たった。

明治政府が誕生後、明治2年8月から約半年間大森県が置かれ、それが翌3年からは浜田県と改められ、同9年には隠岐・松江・浜田をあわせ現在の島根県がつけられた。

この間の銀の生産は慶応2～3年には年産20貫～30貫という低さで明治には大森町の有志が一鉱区を掘ったがおもわしくなく、明治5年の浜田沖地震では銀坑道のほとんどが崩壊した。明治20年になって大阪の藤田組の経営となり、それが同和鉱業(株)に受け継がれた。明治25年～29年頃までは、一時的に産銀料が年平均540貫と増加した。

大正6年の銀山(仁摩町大国の永久坑)の従業員は700余人いたが、坑道の地下水が多量に湧き出るため、採算が合わなくなって遂に大正12年3月に閉山された。

2. 石見銀山に関連する遺跡について

(1) 争奪史関係遺跡

まず、山吹城跡があげられる。城跡は大森町字古城山ホ271番地にあり、現在史跡指定

されている。城跡の構造は現況で見ると、頂上部に主郭（33m×52m）と北に4つの郭、南に3つの郭を有し、城門部などに若干の石垣を残し、主郭の南側には空壕を設けている。周辺には出丸状の平坦部もあるが精査されていないため詳細は不明である。

山麓には長大な石垣が2所にわたって認められ字名から「下屋敷」、「焰硝蔵廻り」がみえ、城跡に関連する遺構の所在が想定される。

山吹城跡の南西2kmには矢滝城跡がある。これ以外の城跡も含め、現時点ではその内部構造について不明な点が多い。

(2) 銀山関係

史跡指定された間歩は大久保間歩・釜屋間歩・本間歩・龍源寺間歩・福神山間歩・新切間歩・新横相間歩の7坑道であるが、文政6（1823）年には休止坑も含め279坑を数えている。主要な間歩については坑道口部分の略測がなされているが、他についてはまったく未整理の状態である。その内3坑道には坑道入口に四ツ留を復元している。他に四ツ留役所（坑口）、精錬所などの銀生産関連遺跡の存在も予測されるが、いずれも不明な点が多い。

(3) 信仰遺跡

1) 墓地・供用塔など

現在知られているものは江戸期にその大半があり、それ以前のものとしては史跡指定されている天正在銘宝篋印塔基壇などが確認しつつある。江戸期の墓地としては史跡安原備中墓・伝安原備中霊所・市指定史跡奉行竹村丹後守墓・同代官鈴木八右衛門墓・同代官会田伊右衛門墓・同代官前澤藤十郎墓・同代官森八左衛門墓・同代官関忠太夫供養塔・同代官阿久澤修理墓・同代官浅岡四郎墓・同代官川崎平右衛門定孝供養塔・同銀山付役人吉岡出雲墓・同銀山付役人宗岡佐渡墓が確認される。他にも大森町内の寺院には近世墓が多数残されている。また、県指定の五百羅漢座像群の北側におかれた宝篋印塔や一石五輪塔、一石宝篋印塔など多くの石造遺物がある。

2) 寺院跡・神社

銀山百ヶ寺と称される寺院のうち、大森町内に現存するのは13寺で、寺院跡が認められる場所は昭和60年度分調査で33ヶ所確認されている。

神社は延喜式内社の城上神社と毛利元就を祀る豊栄神社、銀山の守護神社としての佐毘売山神社があり、豊栄神社境内には江戸末の石造遺物群がある。

3) 五百羅漢座像群

県指定の際に基本的な台帳と銘文の分類がなされているが、今後、当地方の石工集團の動きや銀採掘の技術ともあわせ、調査が必要なものである。

4) 銀山支配関連遺跡

代官所は現在表門と門長屋を残すのみであるが、昭和63年絵図が発見され、代官所内部の構造や関連する建物の配置・構造が判明した。

番所跡としては大森町と銀山を仕切る柵の通り道に設けられた蔵泉寺口番所、温泉津との境におかれた坂根口番所跡などがある。

他には刑場跡、処刑後の遺骸を入れた千人壺、間歩の入口に設けられた四ツ留役所跡などがある。

5) 大森の町並関連遺跡

大森の町並の中には県指定史跡の建物が7件、銀山には1件あり、この建物の構造については既に調査されているが、その付属建物や周囲の構造については不明の部分も多く、庭などについて調査が必要である。さらに寛永12(1800)年の大火以前の町並の遺構についても今後の調査により検出される可能性も残されている。この寛政大火により焼失した家屋は武家61軒、社家4軒、寺院5ヶ所、町家219軒、土蔵26ヶ所と記録がある。また、昭和63年には向陣屋に関する絵図が発見され、その構造等が判明した。

6) 銀山の家並

銀山地区に元来存在した山稼ぎ人の居住地については遺跡として今後の調査を待つところであるが、佐毘売山神社周辺の平坦地や、銀山七谷といわれる仙の山周辺などに建物の存在を予測させる。

7) その他

銀を温泉津港や赤名経由で尾道へ輸送した銀山街道については降露坂を中心としていくらかの部分が残っているが、江戸期の道路敷についても検出される可能性がある。

8) 慶長期の遺構について

山吹城跡北側の「下屋敷」などの北側には「魚店」「上市場」の地名が残され、銀山付役人吉岡出雲関連文書にはこの慶長期の銀山がよくしるされている。初期の鉾山町の残されたこの休谷周辺の調査は当面とりあげられるべき課題である。

I 区の東側では抜き取りがあるものの、約 2 m の間隔で並ぶ礎石を検出した。この建物跡(S B 2)は S B 1 と同様に床面を堅く叩き締め、桁行が 1 間以上で梁行が 2 間以上になり、かなり大規模な建物のようなものである。

S B 1 ・ S B 2 は共に明治 20 年以降に藤田組により建築されたと思われる。石見銀山は明治 2 年官営となり、20 年には藤田組が全鉱区を買収し操業を開始している。これに関しては藤田組の明治期の写真があり、それによれば西側の建物は妻側を銀山川に面した 4 間半 × 2 間の木造平屋建てで、屋根は切妻で瓦ぶきである。桁行 3 間の部分は真壁で高窓をつけている。東側の建物は 4 間 × 5 間で写真からは倉庫か作業場のような建物と考えられる。

この明治時代の遺構の床面の整地層は厚さ 40 ~ 50 cm で、鉱石になるとと思われる角礫や暗灰色粘土を多量に含むとともに、瓦・陶磁器類・寛永通宝・鏡・キセル・鉄製品などが出土した。これらは江戸時代および明治時代の遺物で、江戸時代の遺構がある程度壊された可能性がある。この整地層の下に江戸時代の遺構面があり、建物跡と思われる石列を検出した。

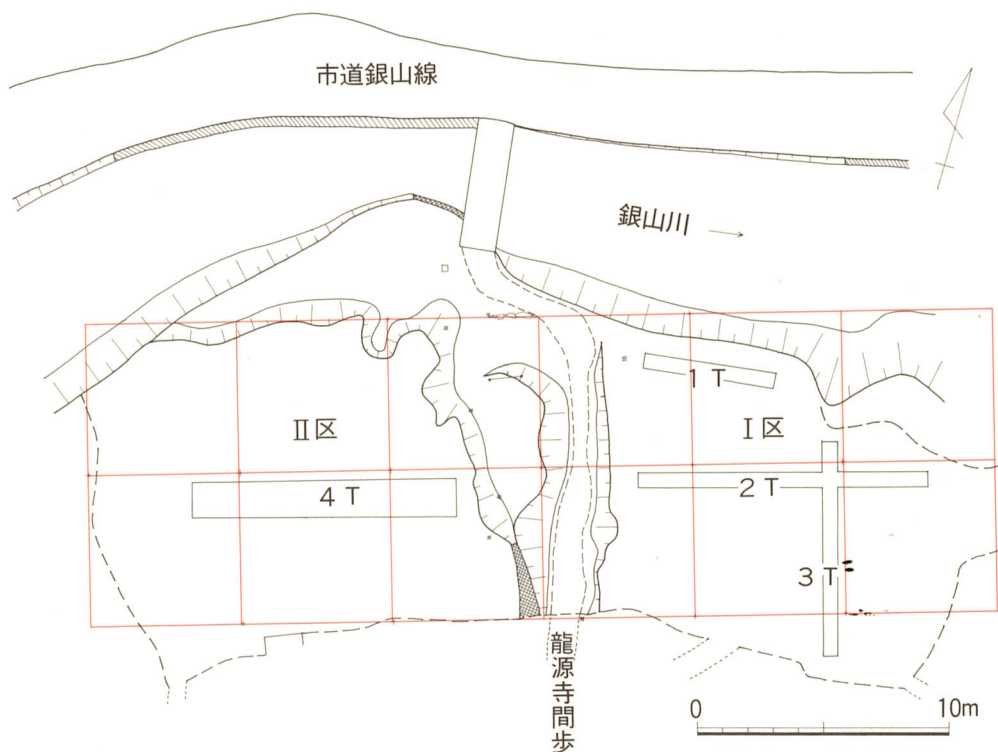


図 3 龍源寺間歩遺跡調査区設定図 (1 / 300)

この建物跡(S B 3)は確認できる範囲で2間×1間あり、その内部に炉状の集石遺構と2m×3mの石列を検出した。この集石遺構の礫はいずれもよく焼けており、この周辺から18世紀代と思われる伊万里焼・石見焼などの陶磁器が出土した。また石列は80~90cm間隔で礎石となりそうな30~40cm大の石があり、その間を20cm前後の大きさの石で埋めている。この石列はS B 3と時期的に併行するものか判断しにくい、炉状の集石遺構の近くということもあり、S B 3と時期を前後した建物跡とも考えられる。またS B 3の南側、建物跡に沿って地中に埋設された暗渠のような排水施設を検出した。

S B 3の南側には岩盤が露出しているが、この岩盤を加工した溜桝状の遺構やピットを検出した。溜桝状遺構は70×60cmのほぼ正方形のものと、90×160cm以上の方形のものがあり、ピットは約径16cm、深さ15cmである。これらの岩盤を加工した施設は、風化がさほど進んでおらず利用したのが短期間であるか、あるいは露出していない状態で使用したこ



図4 龍源寺間歩遺跡I区第1遺構面実測図(1/100)



図5 龍源寺間歩遺跡 I 区 SB 1 実測図

とを示すものかもしれない。また岩盤を平坦に加工し、石を敷き粘土で固めた作業面になりそうな施設もある。これは中央に70×58cmの方形の石を置き、その周りを小さい12~47cmの石で囲んでいる。これらの施設は岩肌にはほぞ状の穴がいくつか確認できることから、S B 3に付属して建築された建物の内部とみることもできる。またこの岩盤の北側にはS B 3内で検出した炉状の集石遺構と同様の集石遺構を検出した。



図6 龍源寺間歩遺跡I区第2遺構面図実測図

I区で設定した第1～第3トレンチの土層観察の結果、表土の下はいずれも赤褐色土で堅く叩き締められた遺構面（明治時代）があり、その下が暗褐色土の整地層で、この層は明治・江戸時代の遺物包含層となっている。この層の下が赤褐色土の遺構面（江戸時代）である。第1トレンチで更に下の土層観察をおこない、江戸時代の遺構面も堅く叩きしめて整地してあること

が判明したが、整地層からは江戸時代の陶磁器類や寛永通宝が出土した。このことからさらに古い遺構面が存在する可能性がある。

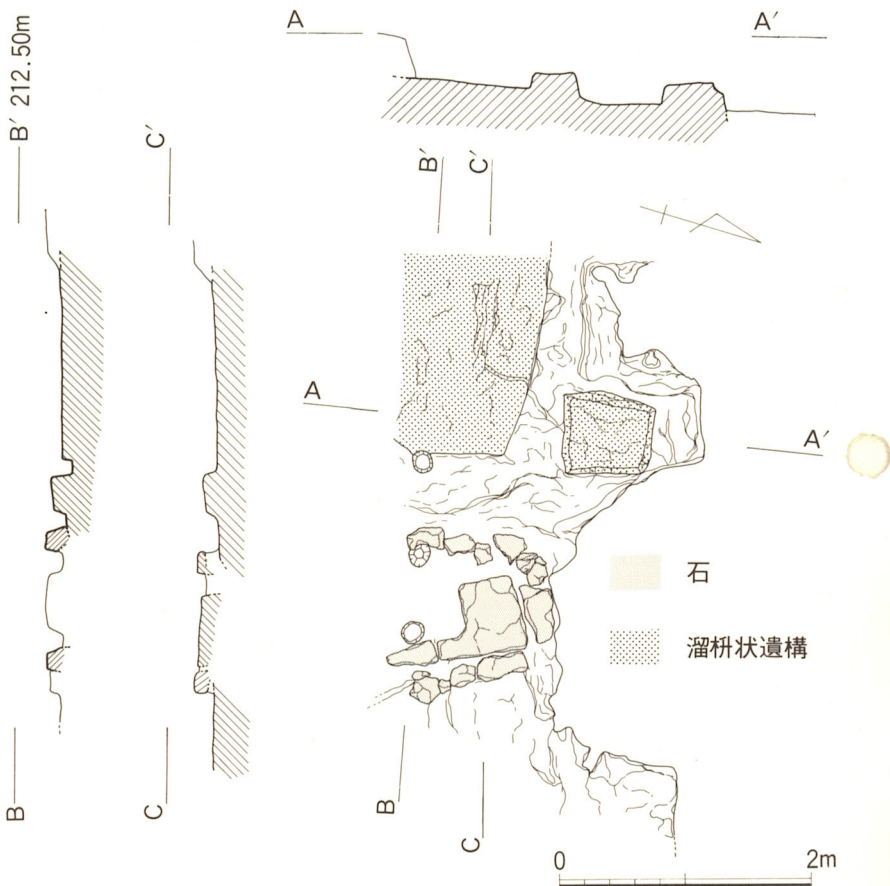


図7 龍源寺間歩遺跡I区第2遺構面実測図



図8 龍源寺間歩遺跡土層図

2. II区

II区では表土剥ぎとり後、石列および整地面を検出した。これはI区で検出したSB1・SB2と同様、明治時代の藤田組の建物跡および整地面になると思われる。調査区の東側で検出した建物跡(SB4)は南北に延びる長さ3mの二列の石列と東西に2mの石列があるが、これが同一の建物になるかどうか分からない。南北の石列は10~40cm大の石が直線ではあるが無造作に並び、東西の石列はこれよりもやや大きな20~60cm大の石が並ぶ。この整地層からは無名異焼が1片出土しており、すくなくとも幕末以降の整地になる。

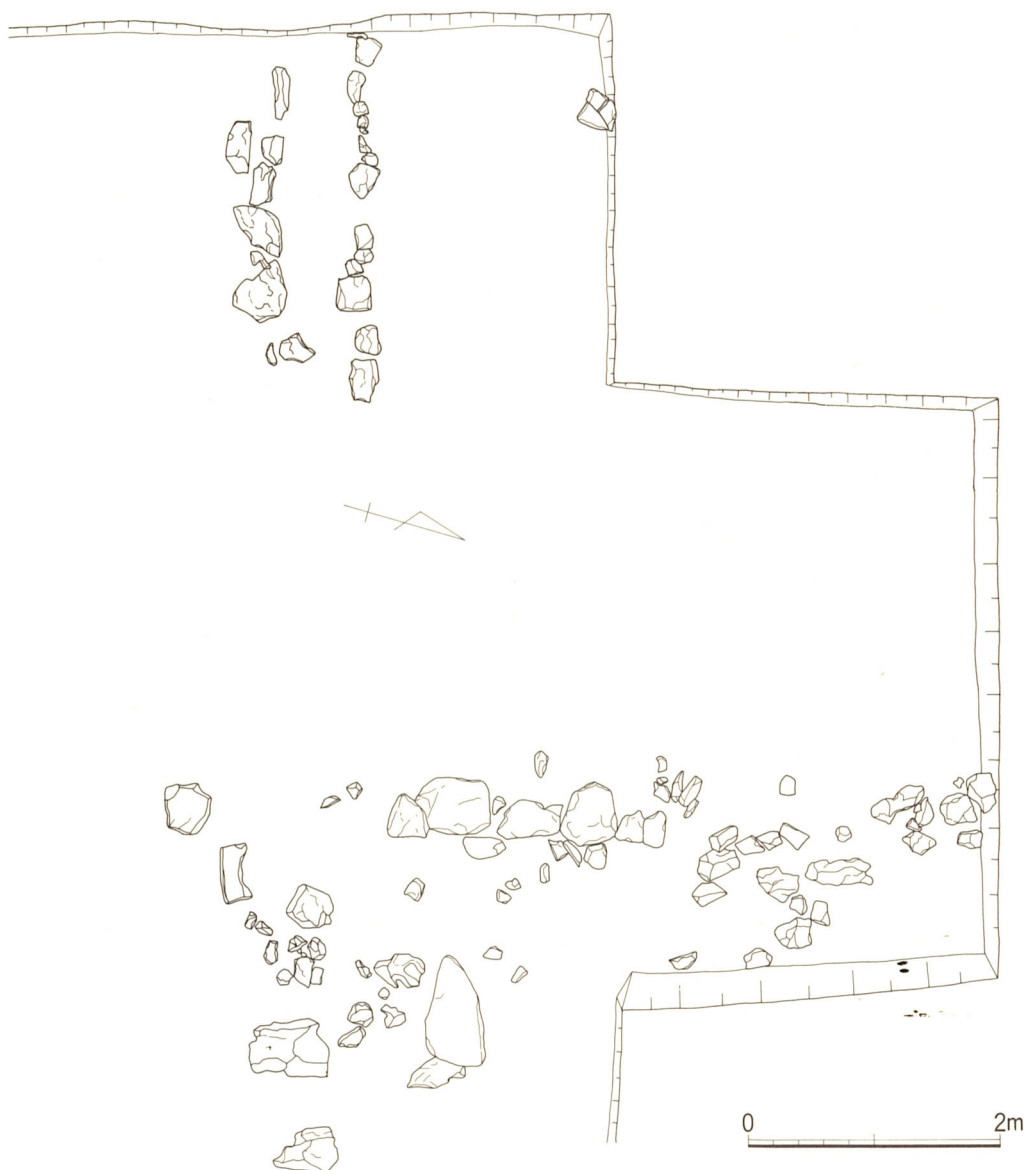


図9 龍源寺間歩遺跡II区第1遺構面実測図

また南側では長さ2 mの石列を検出した。この石列の回りには20~80cmの石が埋設されており、整地面を補強したと思われる。明治時代の藤田組の写真ではⅡ区この場所は資材置場になっている。

明治時代の遺構面の下20~30cmのところ江戸時代と思われる石列を検出した。この建物跡(SB5)の石列の長さは南北に約2.5 m、東西に約4 mである。この石列の大きさはSB4に比べるとやや小形化するものの、ていねいに並べられ建物の基礎となってもよさそうである。南北の石列



図10 龍源寺間歩遺跡Ⅱ区第2遺構面実測図

は西側の端の線が直線になっており、この石列の東側が建物の内部になりそうである。

第4トレンチの土層観察の結果、第1遺構面(明治時代)の下が厚さ30~40cmの礫を多く含む暗褐色土層で、この下が第2遺構面(江戸時代)となっている。第2遺構面の東側で5~10cmの礫が80cm以上堆積している。これは石などで区画された場所に捨てられたと思われる、これらの礫は鉷石を精錬した後のカラミの可能性もある。この第2遺構面も整地してあるが、この整地層からは坑内から運び出したと思われる鉷石や、鉷石を砕く際に使用する要石も出土している。また「龍源寺」に関連すると思われる石燈ろうも含まれている。

第4トレンチにおいて、江戸時代の遺構面の下30~60cmのところ杭や岩盤に掘り込ん

だピットを確認し、この面に遺構が存在すると考えられたので調査範囲を拡張した。その結果、岩盤に掘り込んだ溜枳・溝・ピットや鉢脈を追い掘った試掘坑を確認した。これらの中で溜枳は約140×90cmの長方形で深さ約40cmである。ピットは径10~20cmのもの、径30~60cmのもの二種類に大別でき、これらの中には柱穴になりそうなものもある。溝は幅10~20cmのものが東西に5本走っている。試掘坑は径80cmで深さ70cmである。遺構面から15世紀代と思われる備前焼のすり鉢が1片出土しており、これらの遺構は江戸時代初頭あるいは戦国期まで遡る可能性がある。

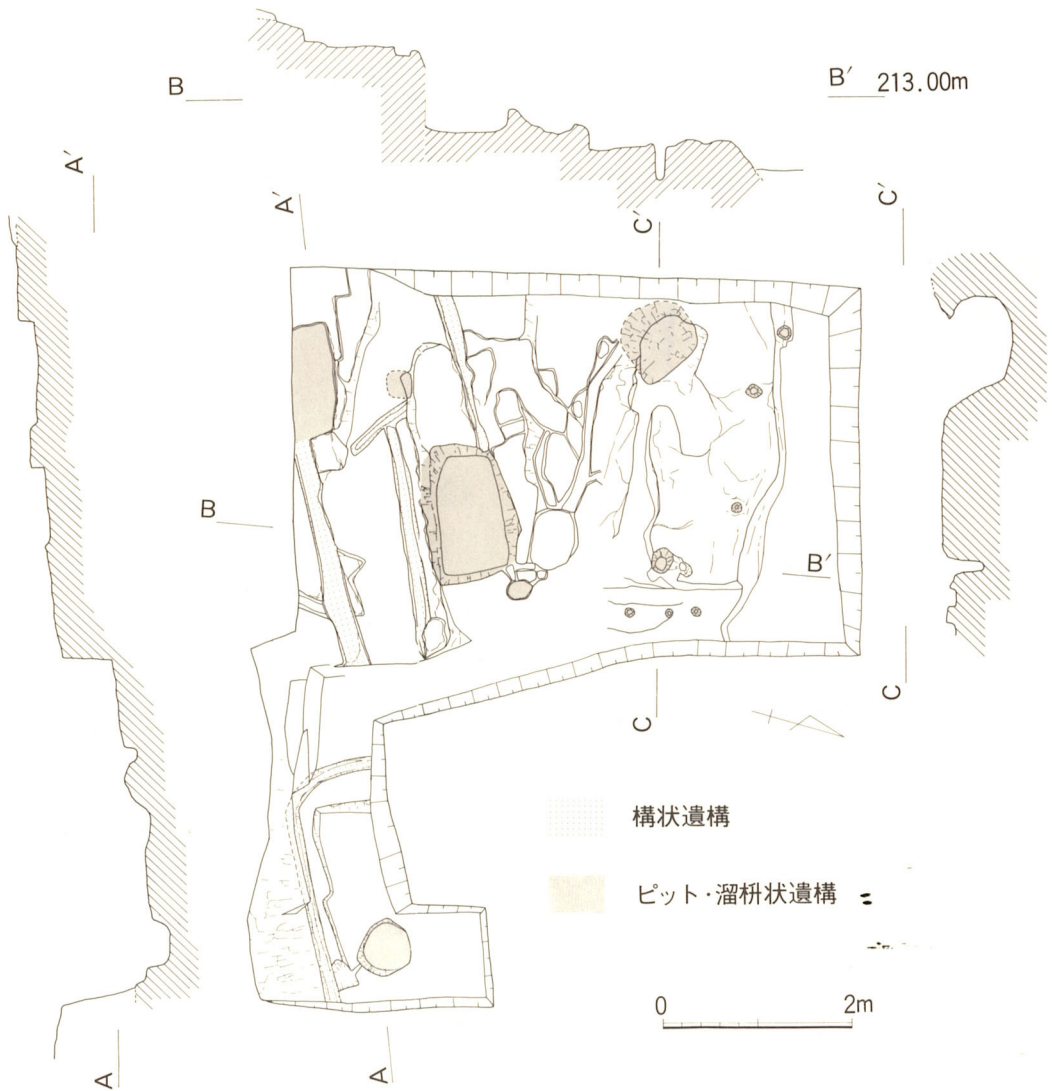


図11 龍源寺間歩遺跡第3遺構面実測図



図12 龍源寺間歩遺跡遺構配置図

Ⅳ 出土遺物

遺物は近世・近代の陶磁器類を中心に瓦・寛永通宝・キセル・鏡・鉄製品や石臼・燈ろう・^{かなめいし}要石などが出土している。

陶磁器類は古い資料として室町後期の信楽焼・備前焼があるが、総じて江戸時代のもものが中心で、近代に降ると考えられるものも多い。遺構に伴うものとして、I区のSB3内の炉状集石遺構の近くからまとまって出土した陶磁器類がある。図13の1は肥前系磁器で、径11.7 cm、器高2.6 cmの皿である。時期は18世紀後半になると思われる。2も肥前系磁器で、径12.5 cm、器高3.1 cmを測る皿で、これは通称くらわんか手と呼ばれるもので、18世紀後半代に主流をもち、長崎県内の窯で焼成されたものと考えられる一手である。3・4はともに肥前系磁器で3は径11.0 cm、器高6.2 cm、4は径11.9 cm、器高6.1 cmを測る碗である。5は復元径30.2 cmを測る素焼きの鉢である。6は径17.9 cmを測り、2つの把手をもつ石見焼の鍋状の陶器である。7は底径で5.3 cmの青磁の碗である。これらの中で3の染付碗は中国の様式を踏襲するものであり、7の青磁の碗とともに時期は18世紀後半代よりも、やや遡るものかもしれない。また5の素焼きの鉢と6の石見焼の鍋状の陶器は外面に煤が付着しており、火にかけて使用されたとも考えられる。

図14はI区の明治時代の整地層出土遺物である。この整地層からは明治時代の遺物とともに江戸時代の遺物もかなり出土している。1・2はともに肥前系磁器で1は底径5.6 cmの碗で、2は底径5.2 cmの皿である。2の時期は18世紀後半代と思われる。3は径10.5 cmを測る陶器で壺の蓋になると思われる。4はかなり大形の壺で、石見焼の可能性のあるものである。5は径8.2 cm、器高5.8 cmの陶器の碗である。6は「藤原作」の銘のある径8.3 cmの柄鏡である。これらの図化した遺物のほかにも肥前系の磁器、備前焼系の陶器、地元産の陶磁器などがあるが、18世紀後半代をさかのぼるものはないと思われる。

図16はII区出土の陶磁器類である。1は復元径28.5 cmを測る唐津焼系の挿鉢である。2は復元径28.2 cmを測る備前系の挿鉢である。3は唐津系の挿鉢ではあるが、時期は江戸時代前期までさかのぼる可能性がある。4は底径4.6 cmの唐津系の皿で、時期は3と同様に江戸時代前期にさかのぼるものである。5は径10.9 cmを測るもので、石見焼の壺の蓋になると思われる。これらの他にII区から出土しているものとしては17世紀後半代以降の陶磁器類があるが、中心は18世紀後半代から近代にかかるものが多い。

以上見てみると、江戸時代の資料の中にも17世紀前半代の皿、碗、甕などがあり、他に

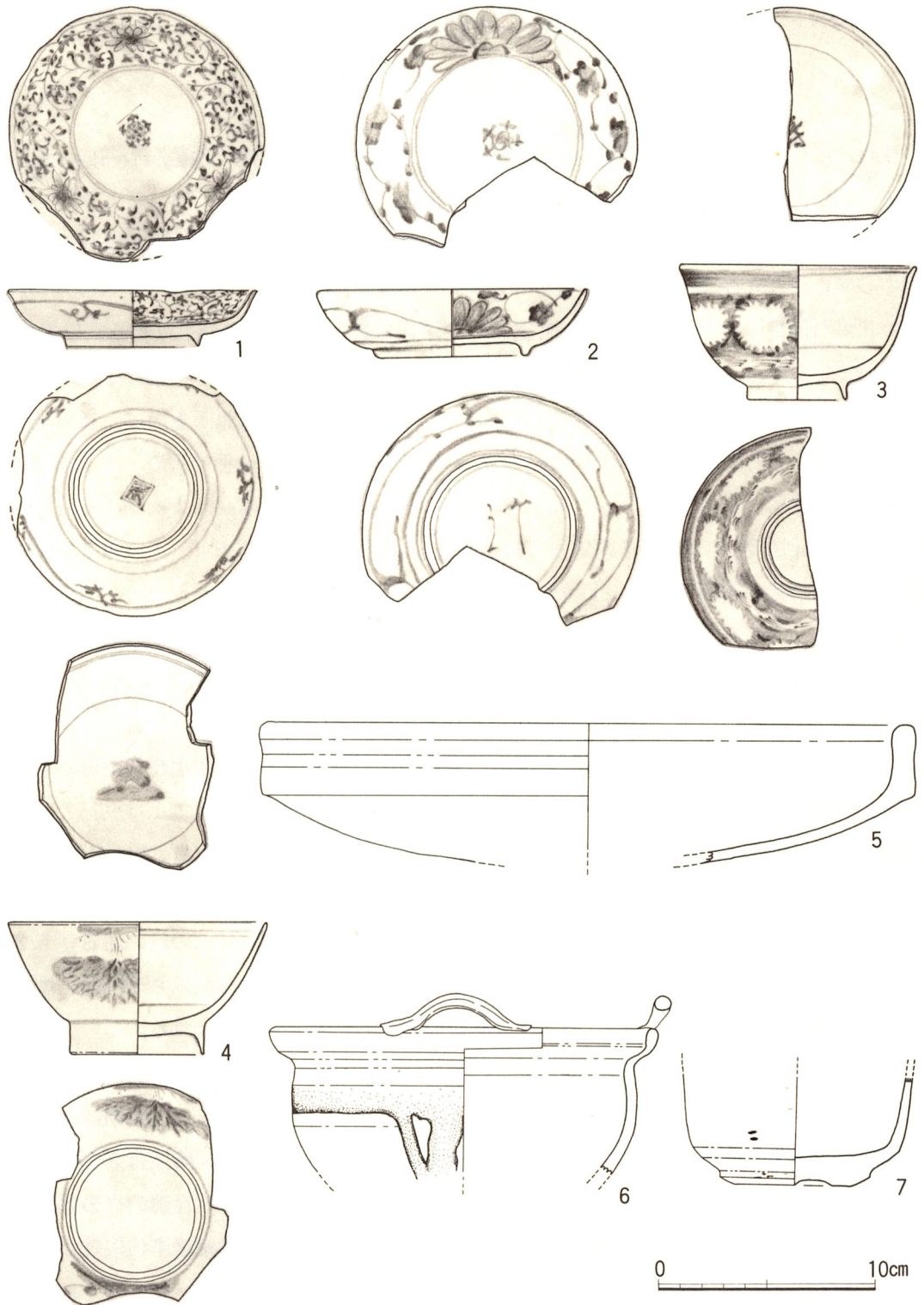


图13 龍源寺間歩遺跡 I 区第 2 遺構面出土陶磁器実測図

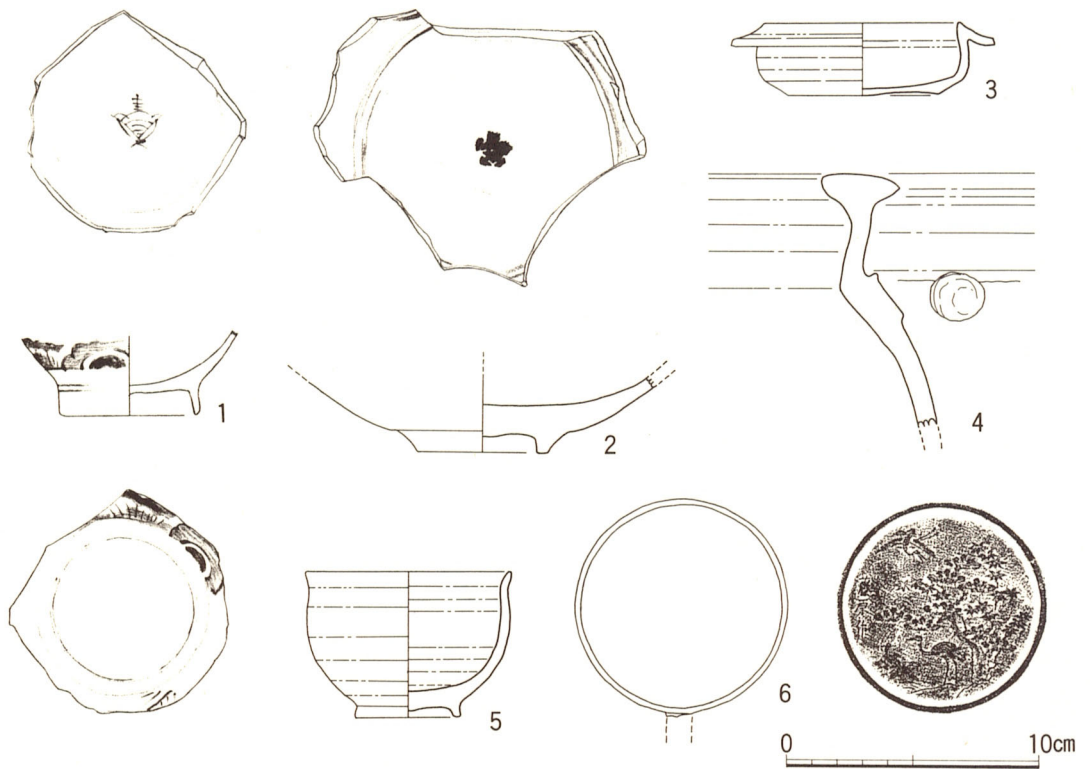


图14 龍源寺間歩遺跡 I 区整地層出土遺物実測図

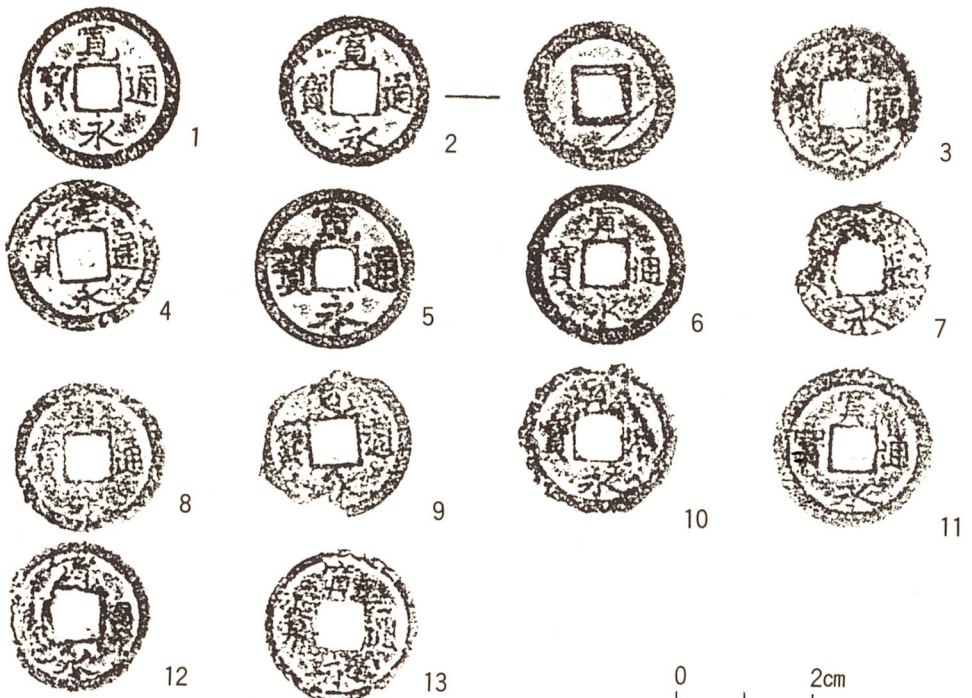


图15 龍源寺間歩遺跡出土古錢拓影

江戸の後期から一部近代にかかる資料等のまともが見られる。

陶磁器類のほかに出土した遺物として瓦・寛永通宝・キセル・石臼・燈ろう・要石などがある。瓦は明治時代の遺構面の整地層から多数出土している。一般に石州瓦は近世まではいぶした瓦が生産され、明治以降に上薬

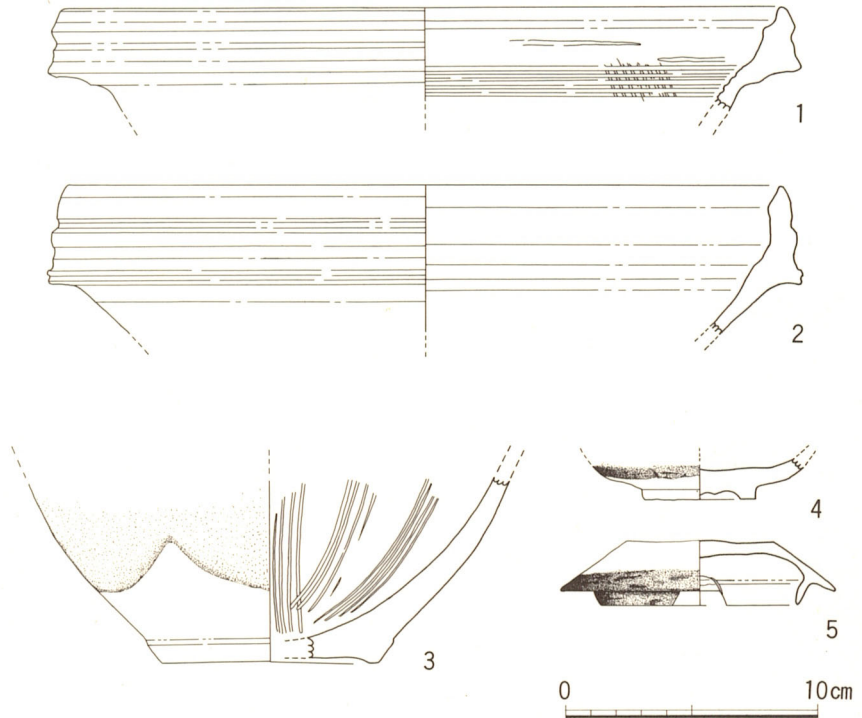


図16 龍源寺間歩遺跡Ⅱ区出土遺物実測図(1)

を塗る製法に変わるようである。寛永通宝は合計13点出土しておりそのうち10点がⅠ区の整地層から出土している。キセルは吸口が2点ありその形態等から江戸時代後期から近代にかけてのものと思われる。

石臼・燈ろう・要石はいずれもⅡ区の整地層(礫層)から、鉾石などと共に出土した。石臼は径約28cmで、凝灰岩で風化が著しい。燈ろうは一辺約24cmで凝灰岩を加工してつくられたものである。要石は全部で15個出土しており、安山岩を使用している。この要石は坑内から運び出した鉾石を砕く際に台として使用したもので、図17に示すように石のいくつかの面を使っている。これらはその窪みの状態からかなり長期にわたり使用したものと考えることができる。

また整地層からはアワビ・サザエの殻がいくつか出土しており、油を入れ坑内の各所に置き、灯として使用したことを裏付けるものである。明治時代の遺構面からは鉄製品がかなり出土しているが、腐蝕が著しくその用途等は不明である。

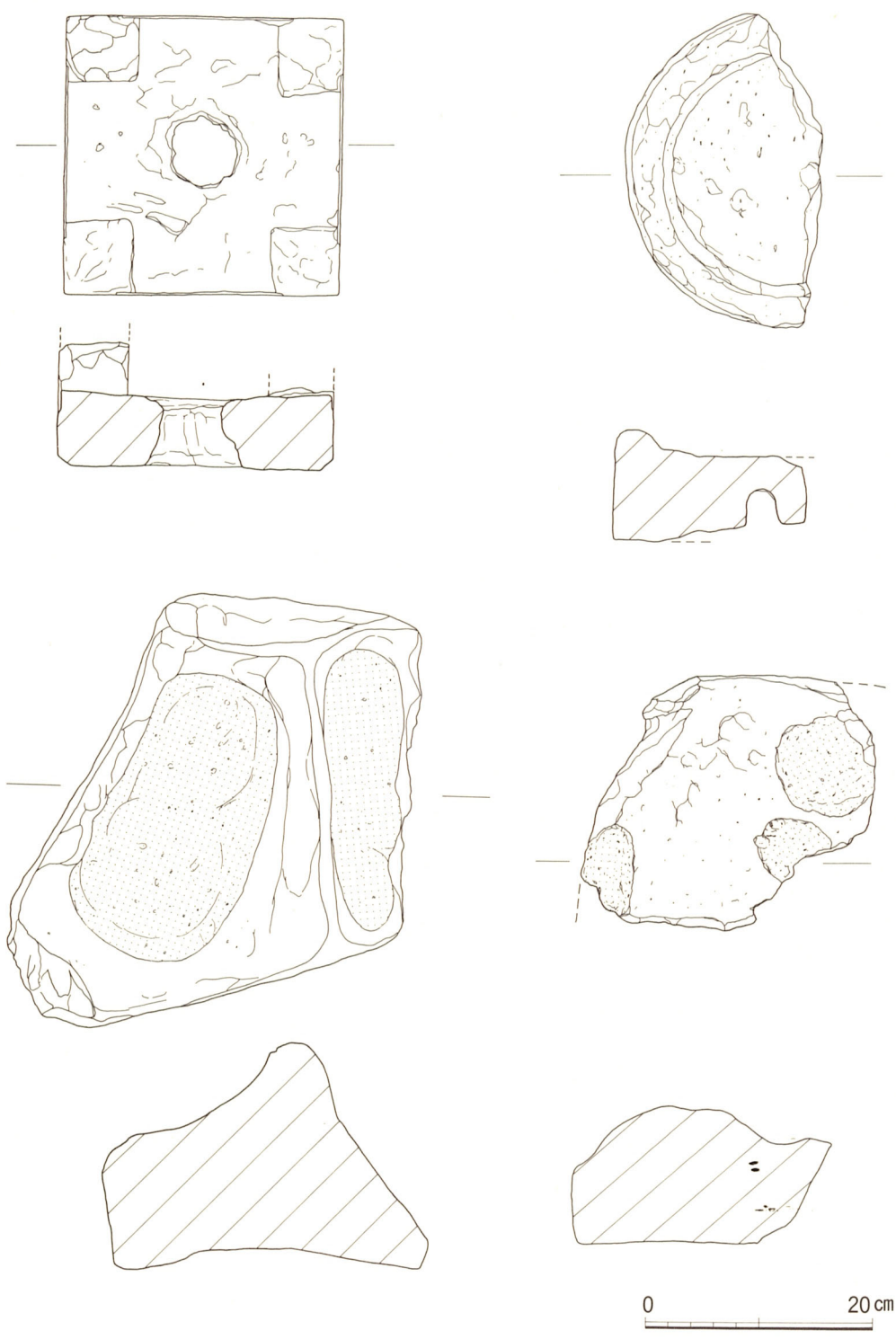


図17 龍源寺問歩遺跡Ⅱ区出土遺物実測図(2)

V ま と め

江戸時代、石見銀山において坑道は「間歩」「山」と称せられた。そして経営の形態から幕府が直営するものを「御直山」、山師が経営するものを「自分山」として分けていた。「龍源寺間歩」は「文化13年間歩改」（1816年）（『銀山旧記』）に「御直山 大谷龍源寺山」と記載がある。またこの「龍源寺間歩」の名は「龍源寺」という寺名に由来するというのが、間歩の上に寺跡らしい平坦面と戦国時代から江戸時代初頭の墓地が確認できるものの、「龍源寺」と確認することはできない。また古文書などからも「龍源寺」という寺名を見出だすことはできない。

間歩入口に置かれた「四ツ留役所」については『銀山旧記』は次のように説明している。「銀山稼方仕方者、四ツ留役所と相唱へ、間歩口に番所有之、一ヶ所に役人三人、同心壱人宛相懸り、夜分ハ役人壱人宛泊り番仕え、昼夜為相稼、掘子、手子、柄山負、間歩内ハ敷内と相唱へ、出入を相改申候」とある。江戸時代の遺構面がこの「四ツ留役所」になるかどうか検出した遺構からは断定できない。

『石見銀山絵巻』の中には「四ツ留之図」「四ツ留役所之図」が描かれている。「四ツ留之図」には坑道の入口に組まれた四ツ留と四ツ留役所の屋根の一部が描かれているが、それによれば、屋根は藁ぶきか板ぶきのように描かれている。「四ツ留役所之図」からは真壁の土壁で、式台があり、畳が敷いてあることがわかる。また鍵置場は運び出した鉾石を6種類に分けて置いている。

調査の結果、検出した遺構のうちⅠ区のSB1・SB2およびⅡ区のSB4は明治時代の遺構で、当時の写真が参考にできたことから、かなり詳細に復元することができる。しかし江戸時代の遺構であるⅠ区のSB3、Ⅱ区のSB5については建物の基礎となる石列については部分的にしか検出できなかったことや、調査面積が限られていたことなどから建物の内容について十分に把握することはできなかった。しかしながら、SB3内で検出した炉状の集石遺構や付近から出土した陶磁器類は、ここで「吹き試し」（簡単な精錬）がおこなわれていたことを示しているかもしれない。また岩盤を加工して作られた溜桝状の遺構等も精錬との関係を考えることができる。これまで間歩の前には「四ツ留役所」があったことは予測されていたが、精錬に関連する施設についても今後は検討が必要であろう。

またⅡ区の第3遺構面で検出した岩盤を加工した溝や溜桝状の遺構は、出土した遺物や鉾脈を追って掘った試掘坑などから、戦国期および江戸時代の初頭に露頭銀を採掘した遺

構の可能性がある。

今回調査した龍源寺間歩遺跡は間歩の前の施設や銀の採掘を考える上でも貴重な遺跡であるとともに、近世から近代までその歴史を辿ることができ、今後の調査方法や石見銀山の遺跡の保存・整備に関しても多くの示唆を与えてくれるものである。特に遺跡の保存整備に関しては、近代以降の開発の遺構も、石見銀山史の一部としてとらえ、保存整備の構想の中に積極的に取り入れていかなければならないであろう。

また、従来広く引用されてきた「石見銀山絵巻」にもその成立や、記載内容について、検討を加えなければならない部分があることも最近発見された異本や、今回の調査結果から明らかになってきており、近世遺跡の保存と整備を考える上で文献の側からのアプローチも不可欠となっている。石見銀山遺跡については総合的な調査体制の確立が迫られている。



龍源寺間歩遺跡全景（北から）



I区第1遺構面S B 1 検出状況



I区第2遺構面SB3検出状況



I区第2遺構面検出状況



Ⅱ区第1遺構面検出状況



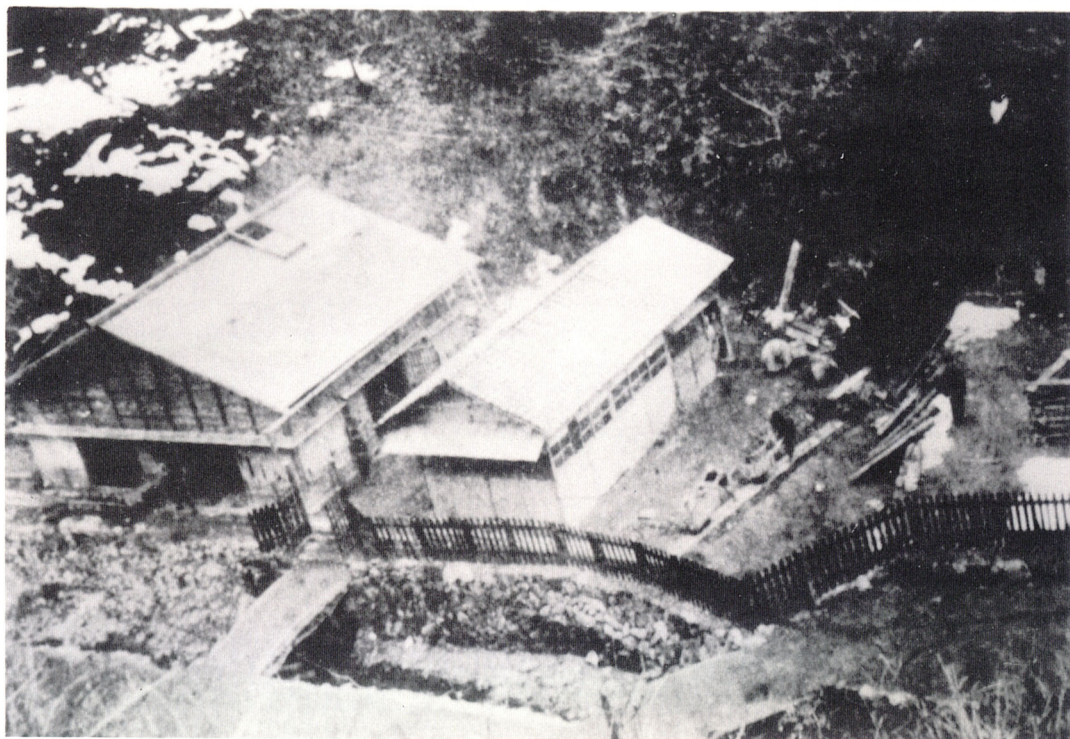
Ⅱ区第3遺構面検出状況



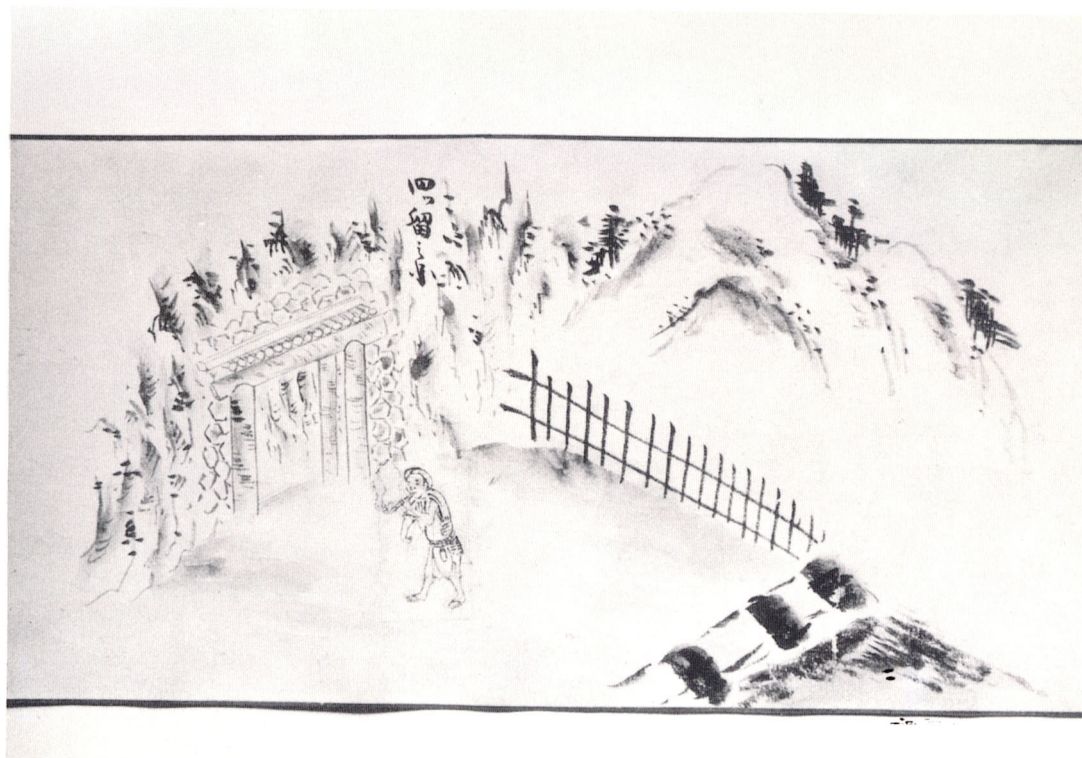
I区全景（南から）



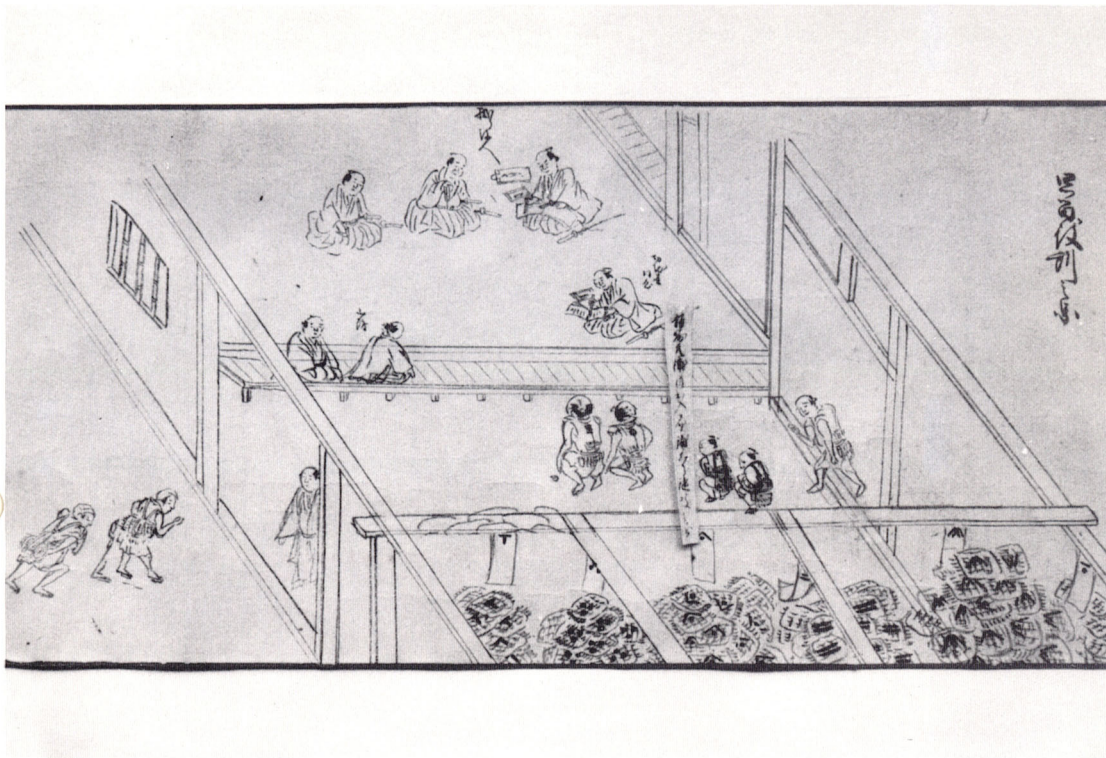
II区全景（西から）



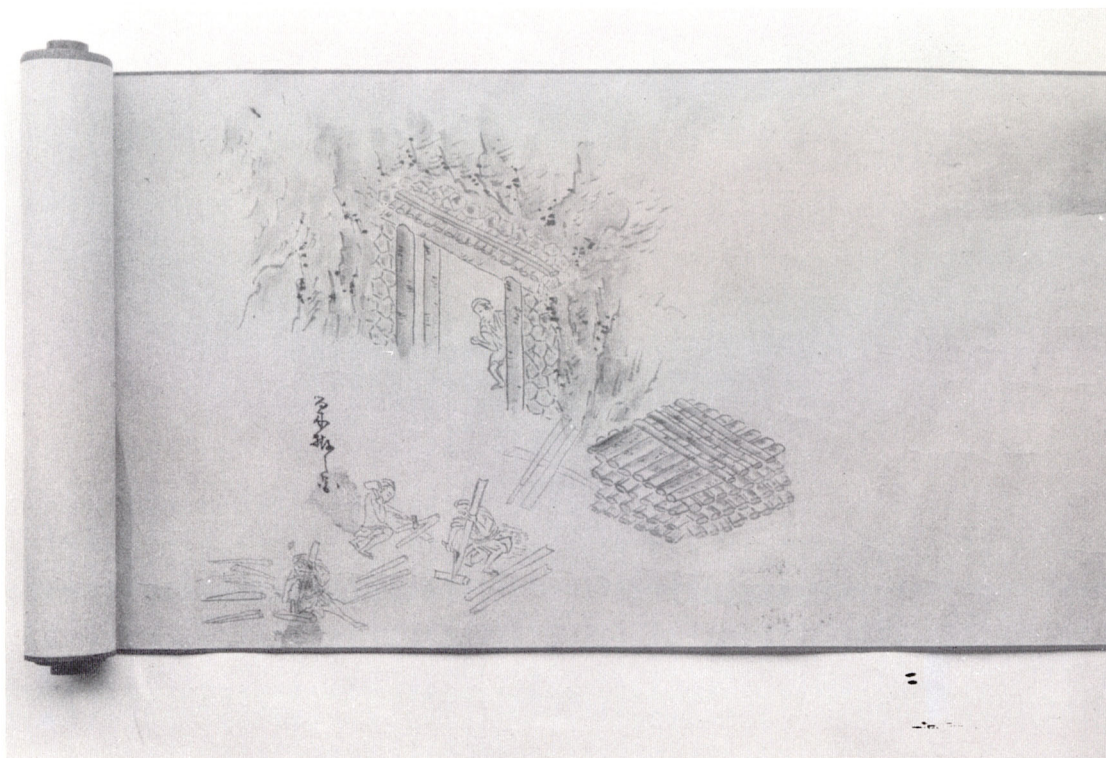
明治時代の龍源寺間歩



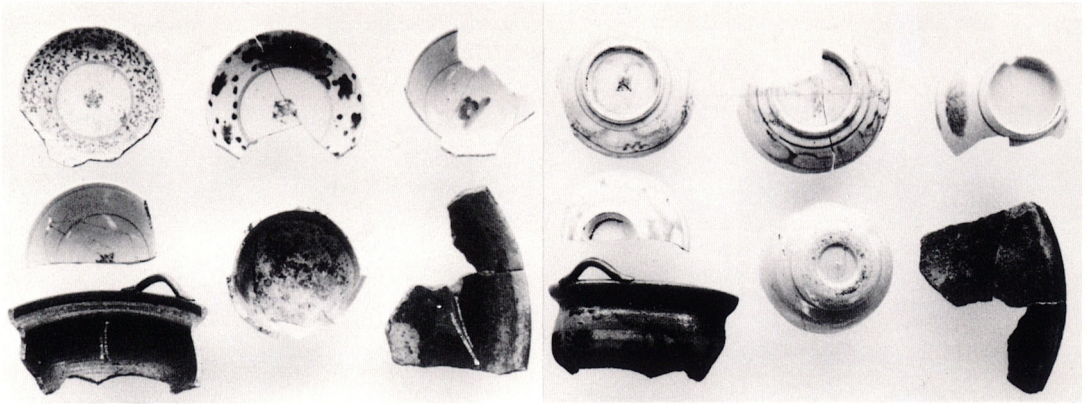
石見銀山絵巻「四ツ留之図」(県指定文化財：上野利治所有)



石見銀山絵巻「四ツ留役所之図」(県指定文化財：上野利治所有)



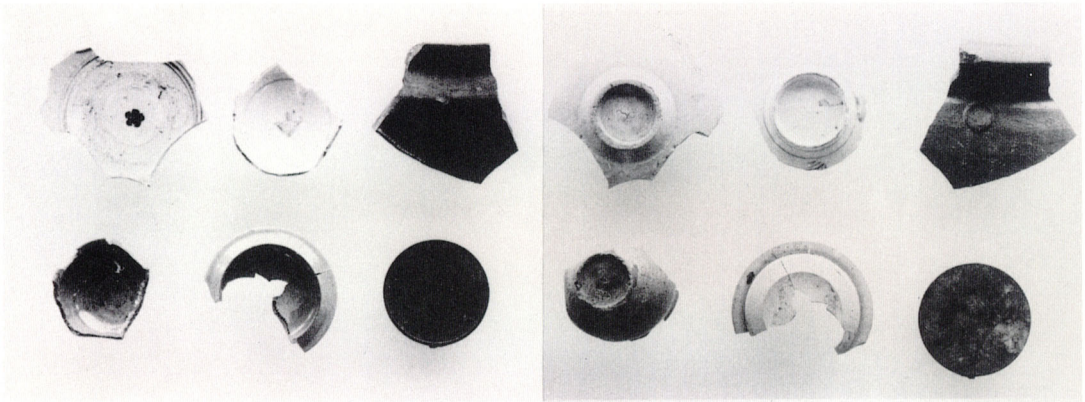
石見銀山絵巻「留木拵之図」(中村俊郎所有)



(内面)

(外面)

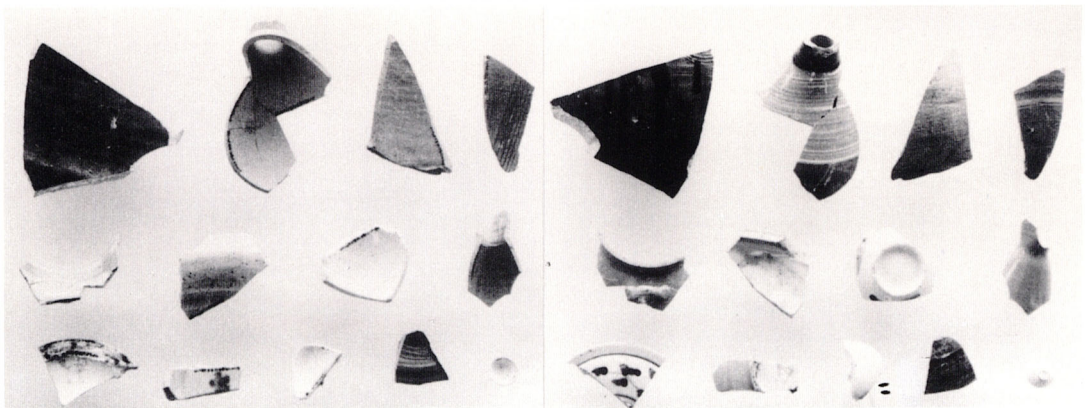
1. I区第2遺構面出土遺物



(内面)

(外面)

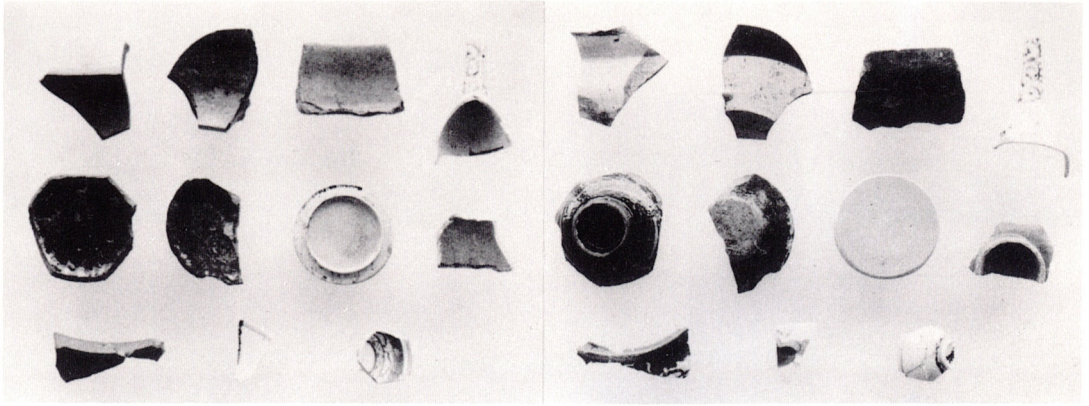
2. I区整地層出土遺物



(内面)

(外面)

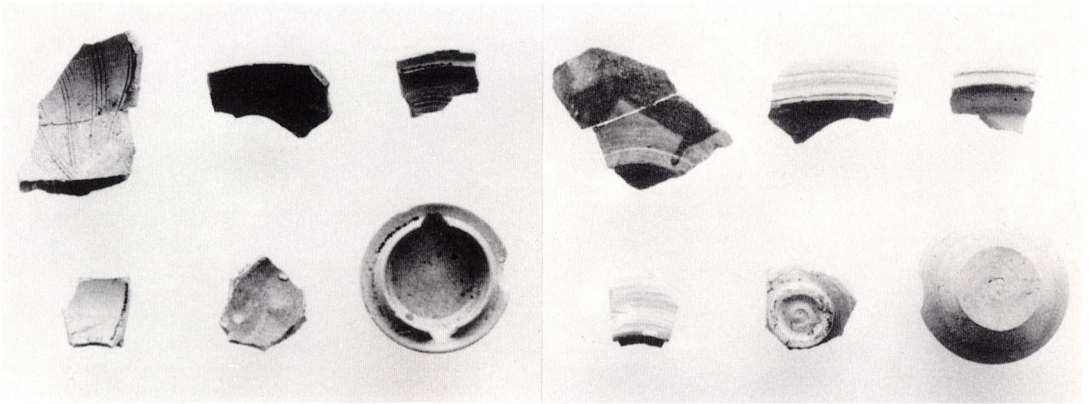
3. I区整地層出土遺物



(内面)

(外面)

1. II区整地層(上層)出土遺物



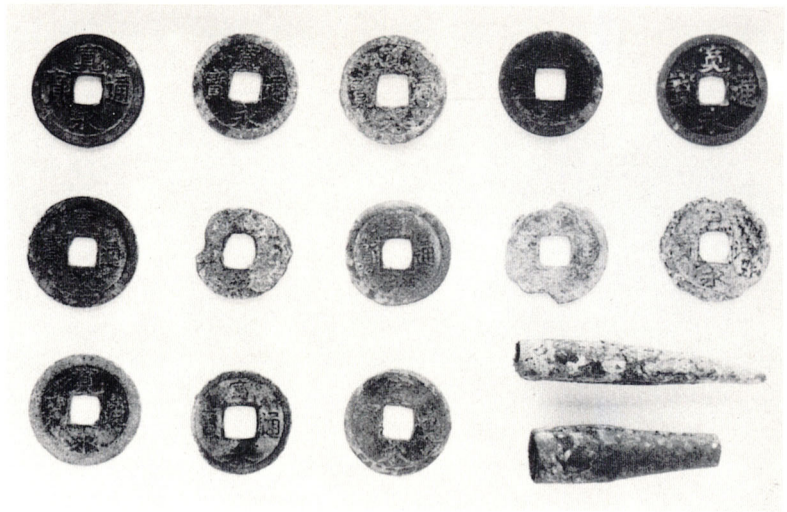
(内面)

(外面)

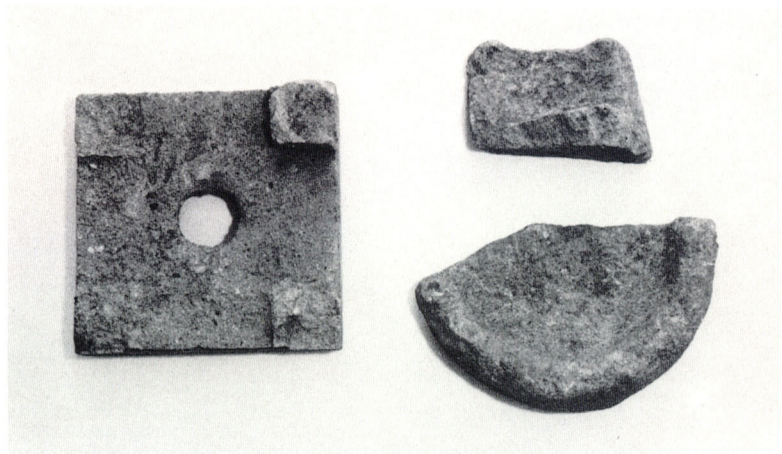
2. II区整地層(下層)出土遺物



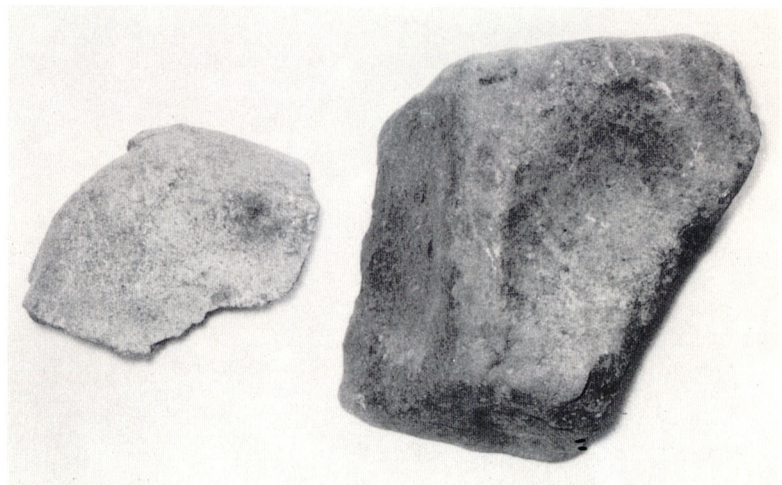
3. 柄鏡



1. 古銭・キセル



2. 燈ろう・石臼



3. 要石

大田市埋蔵文化財調査報告 7

石見銀山遺跡発掘調査概要 2

1989年3月

島根県大田市教育委員会

(島根県大田市大田町大田口1111番地)

